

# HKFA Technical Report 2020

## JFA第44回全日本U-12サッカー選手権大会 北海道大会

### 日時

2020年9月22日（火）  
～10月11日（日）

### 会場

芦別市なまこ山サッカー場  
苫小牧市緑ヶ丘公園サッカー場  
札幌サッカーアミューズメントパーク  
士別市つくも市民サッカー場  
中標津町運動公園

### 決勝戦

北海道コンサドーレ札幌U-12	(0-0) (0-0) (0-1) (0-0)	プログレッシオ勝FCU-12
	Total 0-1	

### HKFA TSG member

宮永 裕教(HKFA TSG)  
坪川 将洋(HKFA TSG)  
新木 啓(HKFA TSG)  
山口 浩司(HKFA TSG)  
伊藤 公(HKFA GKP)

### 〈出場チーム〉

プレイフル函館ジュニア  
北海道コンサドーレ室蘭U-12  
Arearea FC  
長沼マオイフットボールクラブ  
しらゆき少年団サッカーチーム  
DOHTO Jr U-12  
北海道コンサドーレ札幌U-12  
北海道コンサドーレ東川U-12  
稚内ラソフォルテスFC  
サファーランド士別SCJr  
奈井江サッカースポーツ少年団  
羅臼標津FC  
北海道コンサドーレ釧路U-12  
プログレッシオ勝FCU-12  
北見オニオンキッドサッカースポーツ少年団

### 1 事業の概要（大会主催者へのインタビュー）

〈北海道サッカー協会 4種委員長 佐賀 主昌 氏〉

トーナメントを振り返ると、ビルアップにしっかりと取り組んできたチームが増え、チームとしての戦い方が個々にしっかりと身についているチームが多かったと感じています。コンサドーレ札幌はしっかりとボールを繋ぎ、プログレッシオはフィジカルを生かしたそれぞれに特徴のある戦い方で、ここまで勝ち進んできました。決勝戦では、これまでチームとしての狙いをもって取り組んできた部分を発揮してほしいと思いますし、その先に全国のチームが待っているのだと思います。

### 2 両チームへのインタビュー（試合前）

〈北海道コンサドーレ札幌U-12 監督 村井 一俊 氏〉

コロナの影響で準備を始めるのが遅くなり、チームとしてはまだまだのところですが、今できるこの年代でやらなければならないこと積み重ねてきました。6月くらいから始めてきたので、本来ならばもう少しできているであろうところまでは高まっています。視野が狭く、正しい判断ができず慌ててしまうようなところが見られます。強い個があるわけではないのでチームとして関わりながら相手を見て状況判断をするという方向性で臨みたいと思います。

〈プログレッシオ勝FCU-12 監督 西村 昌規 氏〉

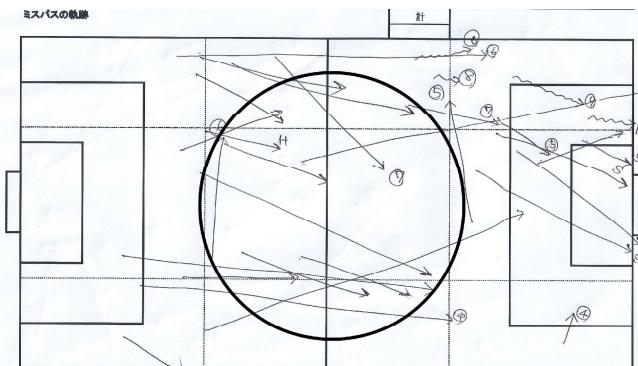
コロナの影響で地区予選の時点ではコンディションが上がりませんでしたが、ここまで試合をすることができて、ようやくコンディションも上がってきました。そのことが結果にも結びついています。決勝戦は絶対王者が相手なので、肩を借りるつもりで挑むのみです。選手全員に注目して見てほしいと思います。



### 3 成果

#### 【組織的な守備】

プログレッソ十勝は、中盤にプレッシングラインを設定し、ボールを中心としたコンパクトな守備で相手ボールホルダーへ規制をかけて、他の選手の的確なポジショニングと予測でボールを奪おうとしていた。また、相手がボールを下げるとき全体でラインを押し上げ、ボールを奪うシーンも見られた。以下はコンサドーレ札幌の後半のミスパスの軌跡になる。中盤でボールを奪えている様子がうががえる。

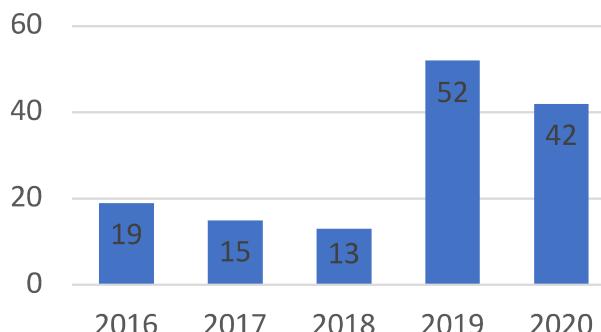


#### 【ポゼッション】

コンサドーレ札幌は、むやみにボールを蹴らずにディフェンスラインから繋いでボールを大事にして攻撃を組み立てていた。的確なサポートと関わりが、確実なボール保持につながっていた。また、ディフェンスラインでフリーな選手を作り、前線の選手がタイミング良く動き出し、くさびのパスを正確にコントロールし中盤の選手に落としてサイドに展開するなど、個々人のテクニックの高さと関わりの質が、ポゼッション成功回数（連続してパスが5本以上つながった回数）の高さにつながっていることがうかがえる。

ポゼッション (回)	前半	後半	延前	延後	合計
コンサドーレ札幌	15	13	1	0	29
プログレッソ十勝	5	6	2	0	13

ポゼッション回数(連続5本以上繋がる)



### 4 課題

#### 【幅と厚みを生かした攻撃】

両チームともに、ボールを奪ってから相手の守備が整う前にワンタッチパスを使い、決定機を作り出す場面が見られた。さらに決定機を増やすために、中央のバイタルエリアを有効に使い、2列目からのランニングや、緩急をつけたドリブルとパスを併用することで相手の守備陣形を崩し、フィニッシュにつなげるプレーをさらに増やしてほしい。

#### 【フィニッシュの質 精度・スピード】

決勝点は、ゴール正面付近で得たフリーキックをプログレッソ十勝の10番が左足でゴールに突き刺した。立ち足でしっかりと踏み込み、インステップで正確にボールをミートした素晴らしいゴールだった。セットプレーだけでなく、一連のプレーの流れからのフィニッシュにおいても、ボールが自分の支配下に来る前にGKのポジションを確認することや、ボールのバウンドに合わせて浮き球を自分の支配下に置いてシュートをするようなテクニックを求めていきたい。また、クロスやこぼれ球からのボレーシュートやヘディングにおいても、ボールをミートしてゴールキーパーの届かないコースへ打てるようなシュートテクニックを身につけてほしい。

シュート (枠内)	前半	後半	延前	延後	合計
コンサ札幌	4(3)	7(1)	0(0)	3(0)	14(4)
プログレッソ	1(0)	4(3)	1(1)	0(0)	6(4)

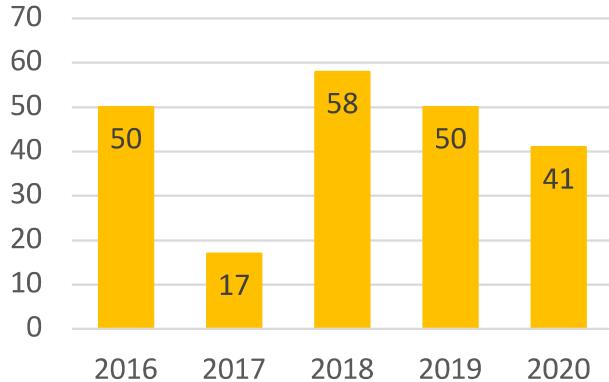
#### 【ボールの失い方】

コンサドーレは、ディフェンスラインでのパスミス・コントロールミスから相手のトップの選手からのプレッシャーを受け、ボールを奪われた場所で相手にフリーキックを与えてしまい、それが失点につながってしまった。プログレッソも同様に、ディフェンスラインの選手が、相手の前線の選手からのプレッシャーを受け、決定機を作られてしまう場面があった。ディフェンスラインでプレッシャーを受けないようにするために、常にGKへのバックパスを選択肢に入れながら、相手を観ることでプレッシャーを受けそうな味方へのパスは避け、パススピードを適切にすることでゴール前での致命的なミスを減らしていきたい。

### 5 スローインの分析

スローインの成功率の内訳はコンサドーレが28%、プログレッソが57%だった。コンサドーレは左サイドバックからロングスローで相手サイドバックの背後にフォワードを走らせるプレーが多くかった。スローインを受けた選手が、縦へ突破しようとするプレーのときに失敗することが多かった。逆に、ボールを受けた選手が密集地帯から脱出し、逆サイドへ展開するときに成功することが多かった。

スローイン後、パス1回成功 (%)



## 6 GKのプレー（攻撃）

### （1）パス&サポート

GKの足元の技術が向上していることから、GKが攻撃の起点となり、ビルトアップをしながら、ゴールを目指す場面が多く見られた。また、GKがサポートポジションで幅を取ることにより、味方DFが攻撃に参加、数的優位を作りながらゲーム運びをしていた。

### （2）ディストリビューション

GKがボールをキャッチした後、味方の位置状況を把握、素早くアンダーアームスローでつなぎ、攻撃に転じるなど守から攻への切り替えが早かった。

チームでボールを大事につなごうという戦い方から、味方選手も素早くポジションを取り、GKも確実性のある選択肢を選びながらプレーをしていた。

## 7 GKのプレー（守備）

### （1）クロス

CKの場面で、相手、味方が混在する中で、しっかりとボールのコースに入り、高い位置でボールを1回でキャッチしていた。身体の向きやキャッチの姿勢など改善すべきポイントはあるが、勇気のある飛び出しで、ピンチを防いだ。

### （2）シュートストップ

相手選手がドリブルをしながらゴールエリアに侵入し、グラウンダーのボールでパス、

相手選手がシュートを打つと同時に身体全体でブロックングしてゴールを守っていた。パスを出した選手とシュートを打った選手を同一視できていたことから、良い移動から準備ができ、好プレーにつながっていた。

## 8 両チームへのインタビュー（試合後）

〈北海道コンサドーレ札幌U-12 監督 村井一俊氏〉

なかなか最後のところが崩しきれず、ゴール前のチャンスを決めきれずというところであった。ビルトアップについてはある程度の成果があった。サイドバックはやや低めのポジションを取らせることで、相手のマークを引きつけ、中盤にフリーマンを増やそうということについてはチームで共通理解を図って実践することができた。

中盤でボランチの関わりがやや希薄で、センターをついて攻めたり、サイドから崩していくたり、サイドチェンジを試みたりと、攻撃に変化をつけることができなかつた。クロスやシュートの精度を欠いたことも反省点として挙げられる。

個人の技術を高めることで、バタバタしてしまうところを改善したいことと、積極的にボールに関わりを持ち、ボールを受ける回数を増やすようにトレーニングしていきたい。

〈プログレッソ勝FCU-12 監督 西村昌規氏〉

コロナの自粛で全然コンディションが上がらなかつたこともあり、難しい決勝戦だった。選手達が可能性を秘めているのは分かっていたが、それでも上手くいかずコツコツ積み上げてきて、ようやく道東予選くらいから本来の力を出せるようになってきた。その勢いもあり、決勝戦ではうまく戦うことができた。

全国大会は初めての経験になるので、大人も子どももわからないことばかりだと思います。ただ、ジュニア年代で全国大会を経験できるというのは珍しいことなので、全員出場させて、その後のサッカー人生にも繋げてもらいたい。

## 9 まとめ

コロナウイルス感染症の影響により例年とは異なる状況の中でもこの大会を開催し、無事終えられることで、選手の成長に大きく貢献し、様々な成果や課題を再確認できる大会でした。

最後に、本TSG活動にご協力いただきました佐賀4種委員長をはじめ、4種委員会及び出場チームの指導者の皆様、そしてこの活動にご協力頂きました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。